# 国語の授業実践報告

三重野　由　加

## 一、はじめに

「教育」が「洗脳」であってはならない。しかし「放任」であってもならない。

随分前から、詰込み教育の弊害が叫ばれているが、ある程度の詰込みは必要である。幅広い基礎がなければ、何が面白いのかを発見するところまで到達できないからである。また、理系重視の風潮の中、受験科目に必要ないとか、実践的でないという理由から国語が軽視される傾向にあるが、これも誤りである。

そこで、新学期初回の授業は、生徒たちが「国語」から学ぶべきこと、つまり「なぜ国語を学ぶ必要があるのか」の説明から始めた。理由が分かり必要性を感じれば、勉強への意欲も湧くだろう。実際、中学生だった私は、「英語の言い換え表現によって、どのようなニュアンスの違いが生じるのか教えてほしい」と言ったが、担当教師に「余計なことを考えず、覚えろ」と言われ、それ以来英語がつまらなくなった経験を持っている。大人になってその意味が分かり必要性を悟ったとき、もの凄く悔しい思いをした。

まず次章では、やや長くなるが、生徒たちに語り聞かせている内容をほぼそのままに述べてみたい。

## 二、「国語」という授業

まずは、国語で何を勉強するかという話をします。

学生時代に学ぶことはすべて、一人間として社会を生き抜くための道具や技術です。その前段階にある受験で点数を獲得することは、ついでであり、受験はたんなる通過地点にすぎません。すべての科目が、同程度に必要です。できるだけ広く学ぶことで、自分の思考の裾野が広がり、その土台に見合った高さの建物を建てることができます。

その中で、国語の授業の目的は、他人の書いたものから、その

人の言いたいことをできるだけ正確に読み取り、それをもとに、自分の考えを深めていくことです。つまり、他人を理解し、自分を表現する道具である「ことば」を学ぶのが国語の授業です。

たとえば、犬小屋を作るためには、まず、犬小屋がどんなものであるかを知らなければなりません。その形態や目的を正確に把握した上で、作業にとりかからねばなれません。すると、板、鋸、金槌、釘、そして、防水のためのペンキなど、数多くの道具が必要であることが分かります。しかし、それだけでは不十分であり、それらの道具を使いこなす技術も必要だと分かります。

無論、私たちは、将来もっと大きな建物を建てたいと願うはずで、そのためには、さらに多くの道具と高度の技術が必要となるであろうことは、十分に想像できるでしょう。だから、自分を表現したいと考えるなら、できるだけ多くの「ことば」を学び、自分のものとしてしていくことが必要になるのです。それが他人に伝わるものであるためには、その相手を理解するための「ことば」を知る必要があります。

また、大きさだけでなく、自分なりの工夫を凝らした犬小屋を作りたいと思うかも知れません。想像力というのは、実は、既知のものの組合せです。知識が乏しければ、組合せ、つまり想像も限定されます。だから、できるだけ多くの知識も必要です。この時、知識はあくまでも組合せるための材料であり、それ自身で何かができるというものではないことを知っておきましょう。

組合せは、つまり考え方ということです。自分だけの考え方は、そんなに簡単に定められるものでもありません。他人の書いたものを読み、そこに書かれたことから知識を増やし、他人の考え方も一つの知識として学んでいきます。そうした中から、自分なりに一番いいと思える考え方を作り上げていくのです。

つまり、国語の授業でたくさんの文章を読むことは、考え方を学び形成するための知識を習得することです。

「おはよう」と挨拶されて、「肉マン」と答えることはないはずで、「おはよう」と答えるでしょう。こんな簡単なことでさえ、「おはよう」が朝の挨拶を意味し、そう語りかけられた時には、こちらも同じように挨拶を返すべきだという判断が下せるからできることで、「おはよう」ということばと、その意味がわからなければ、実はできないことです。森首相が、「ハウ・アー・ユー」というべきところ「フー・アー・ユー」と言ってしまった際、せっかくクリントン大統領が「ヒラリーの夫です」と冗談で返してくれたのに、彼はそれが分からず「ミー・トゥー」と答えてしまったという話は有名ですね。

日常生活において、相手の言っていることを正しく聞き取り、相応しい答えを返すことと、文章を読み、設問に答えることは全く同じです。違うのは、生活の中で学べることばだけでは不十分であることと、感情・主観によって判断してはならないということです。しかし、つきつめれば、日常生活においても、感情・主観に頼らず、他人のことばを判断し、自分の考えを伝えることができれば、もめごとも起きにくくなるのかも知れません。

いずれにせよ、人間が、ことばでしか他人の考え（気持ち）を理解できず、自分の考えを伝えられない以上、それが可能なかぎり正確に理解し伝えられた方がいいに決まっています。だから、ことばを学ぶ必要があるのであり、決して、受験のためなどではないことが分かるでしょう。もし、自分は理系だから国語は要らない、などと考えている人がいたら、自分を数字や記号で語れるかどうか考えてみて下さい。逆に、国語は得意だと思い込んでいる人がいたら、何となく感覚で読んで、分かったつもりでいはしないかを考えてみて下さい。日常的な内容であれば、それでも通用するかもしれません。でも、ちょっと複雑な内容になったり、抽象的な内容になったりすれば、感覚など役に立たなくなるということを、まず知っておいて欲しいと思います。

何度でも言いますが、国語で学ぶべきは、他人を理解し、自分を表現するための道具と技術を学ぶことなのです。

以上のような内容の話から、新学期初回の授業は始まった。

## 三、学習の流れ

この章では、実際の授業の進め方を提示したい。

1．【宿題】自宅で、教科書の指定された箇所を読んでくる。
（評論・論説の場合は一単元全文／韻文の時は一作品）

その際、気になった箇所には鉛筆で印を付け、思いついたことは書き込みをする。

①読後の意見（感想）を、文章にしてみる。

＊作家の伝記的事実や、一般的知識を加えることなく、純粋に著作だけを読むよう指示。分からないことばは辞書を引くよう指導。

2．【授業】①を提出、または、発表させる。

各意見の要点をまとめ板書。

＊この時、ことばの意味を取り違えていたり、使い方が不適切であるなどの場合には指導する。

また、発表内容を変えないよう、稚拙なことばや話し言葉を書き言葉へと置き換え、説明する。

←

②全体が出揃った時点で、それまで出された他人の意見への意見や、自分の意見の修正などを発表させる。

←

③　①・②から、結論をまとめる。

▼ここまではすべて生徒たちの意見のみで構成。

←

③で、生徒たちが提出した結論の、矛盾点や不備を指摘し、次回までに(a)問題の解決を求める。

3．【宿題】自宅で、再度、本文を読み、(a)の課題について、文章にまとめさせる。

4．【授業】2の流れを繰り返し、最終結論をまとめる。

←

生徒たちの提出した意見では、不十分であると思われる点について補強する。

以上のような流れで、一つの単元が終了する。

## 四、実際の授業――教材・寺田寅彦「鉛を食う虫」――

この章では、先の章で提示した学習の流れの具体例を挙げる。文頭・文中の数字は、「二　学習の流れ」に対応している。

なお、紙幅の都合上、必要最低限に抜粋、要約してある。

まず、寺田寅彦「鉛を食う虫」の梗概を示しておきたい。

寺田が政府機関の研究所を訪れた際、文字通り鉛を食べて鉛の糞をする「鉛を食う虫」を見せられる。食った鉛をそのまま排泄する行為は、人間から見れば全く分からないが、それなりの意味があるはずだと考える。そして、人間の学校教育へと連想が及ぶ。その結果「無駄を伴わない滓を出さない有益なものは一つもない」という結論に達する。

2　①　生徒の感想発表内容　＊（　）内は教師の発言

A君・B君「世の中に無駄なものは何一つないんだということが分かった」

C君「人それぞれの価値観があることが当然だと分かった」

D君「無駄なものはやっぱり無駄なんじゃないかと思った」

←

②　①についての意見交換

（質問：どんなものが無駄なのか？）

D君「たとえば、戦争とか、国境です」

（質問：皆さんは、D君の意見についてどう思いますか？）

A君「僕は、さっき無駄なものはないと言いましたが、やっぱり戦争は無駄だと思います」

E君「僕も戦争は絶対無駄だと思います。たとえ勝ったとしても、国力が低下するからです」

（質問：国力が低下しなければ無駄ではないのですか？）

E君「……」

C君「戦争は見方によって無駄かどうか決まると思います。戦場に行かないで命令する人たちにとっては、それが勝敗で決まり、戦場で戦う兵士たちにとっては関係ないことだと思います」

B君「僕は、戦争も無駄ではないと思います。なぜなら、昔戦争があったから、今の平和があると思うからです」

E君「戦争など始めからなくて、ずっと平和である方がいいわけで、やっぱり無駄だと思います」

（質問：そもそも「平和」ってなんだろう？）
B君「平和は戦争のない状態のことで、昔は戦争があることが普通だったから、それをなくしていって平和という考えが生まれたんだと思います。だから、無駄なものはないと思います」
（E君の言う通り、「戦争」そのものは絶対に無駄だし、悪いことだし、してはいけないことであることは間違いないよね。そう言えるのは、B君が言ったように、かつて多くの戦争があって、そこから後世に生きる我々が、そう学んだからじゃないかな？）
D君「僕は、初めに無駄なものは無駄だと言いましたが、皆の話を聞いていて、考えを変えました。無駄なものがあるんじゃなくて、それを無駄にする人間がいるんだと思います」

←

③　①・②のまとめ
（要するに、同じものでも見方が変われば、その価値が変わるということでいいのかな？）
一同、首肯く。
C君「だから、人によって価値観は違うということを前提に考えなければならないと思います」
F君「僕も、人によって価値観は違うし、すべての人の価値観は同じように尊重されるべきだと思います」
一同、首肯く。
（じゃあ、たとえばオウム真理教の信者とか、殺人犯の価値観も、尊重するわけ？）
一同、考え込む。
（個の尊重とか、個性の発揮とかってことばが罷り通っていますが、ナンデモアリという意味で通用していますよね）
A君「最近、テレビのCMにもなっている「自己虫（自己中心的な人を虫に喩えたもの）」とかはいけないと思います」
B君「他の人に迷惑をかけるものは駄目だと思います」
（ということは、「すべての～」というのは嘘なんだね）
ここで発言が止まってしまったため、これを宿題とする
（(a)では、皆さん。個を尊重するための条件と、について、自分なりに考えて文章にまとめてきましょう。）

←

（皆さんから提出された意見を集約し、その中からよくまとめてあるものを発表します）
G君「日本には、法律があって、それを守る義務があります。それで初めて個人の権利が保証されるのだから、個の尊重というのも、法律の範囲内に限られると思います」
Hさん「個の尊重というのは、他人を思いやる気持ちの上に成り立つものだと思います。お互いがお互いを尊重しない、どちらか一方だけの尊重はありえないからです」

（何か付け足したい、あるいは疑問や反論などがある人はいませんか？……何もなければ、これらをまとめます）

右のやりとりの間、生徒の意見を書き言葉にまとめつつ板書する。その際、言葉の意味を取り違えているものについては指摘し、もっと適切な表現がある場合それを教えたりする。全体の意見がでつくし、まとめに入る段階で、板書を全て消し（この時点で、だいたい黒板は文字で埋め尽くされているので）、改めてまとめを書き、全員に納得できるかどうか吟味させる。しっくりこない点が見つかれば、いくつでも言い換えの表現を提示し、自分にとって一番納得できる言葉と表現を可能な限り見つけさせる。

無論、十五、六才の読書経験も実体験も少ない子供たちであるから、知らない内容について初めての言葉で語らねばならないという場合の方が多い。そこで、できるだけ彼らの体験の範疇から想像し得るような具体例を挙げることを心がけている。また、分かったら首肯く、分からない時は、首を横に振るなり、助けてほしいという視線を送るなり、挙手して発言するなりするように徹底している。もし一人でも分からないという生徒がいれば、その子に向け、何度でも説明する。すでに分かっていると考えている生徒たちも、そのことによって、自分の考えのズレに気づいたり、考えを深めたりできるという点で非常に有意義であると考えている。

また、宿題の論述は、各自の授業用ノートに書いて提出させる。授業中の板書の記録と、そこに添えられた書込などを同時に読むことで、理解の程度が推測され、添削の際に、その内容を盛り込むことができる。

## 五、生徒の積極的な参加のために

授業は、右のようにして進められるため、右の「鉛をかじる虫」では十時間ほどの時間をさいた。この学級は、私立高校の特別進学クラスの一年生であり、授業方法、教材、定期試験のすべてがこの学級単独のものである。こうした授業形態は、指導要領にのっとった時間配当や進度を気に掛けなくてもよいという利点の上に成り立っている。

先年夏の立命館大学日本文学会国語教育ゼミナールにて発表の際には、この点について、普通は無理だという意見を頂いた。だが、自由な授業形態については、私自身の公立高校時代を思い返してみても、特に違いはない。定期試験が各学級個別のものであっても、得点結果によって調整するなどの不公平是正は十分可能だと考えられる。実際に、年度末の結果を見て、あまりに平均点が低いようであれば、調整する予定でいる。

また、進学クラスとはいえ、前年までは中学生であり、読書などほとんどせず、部活動を行なっている者もおり、さまざまな性格を持っている生徒の集まりである点においては何の変わりもない。また、ご多聞に漏れず、国語は苦手な生徒が多い。そこで、

彼らが積極的に授業に参加するよう、いくつかの試みを行なっている。

まず、教材で考えているテーマとは一見無関係な時事問題や、時には芸能情報のようなもの（こちらが多かったりする）を面白可笑しく話して興味を持たせるようにしている。そのため、ワイドショーや週刊誌などはこまめに見聞する。あるいは、人気マンガや話題の映画などに共通するテーマのものがあれば、その話をすることもある。話の内容が面白ければ、黙って聞き入るものである。教材を扱っている時は眠っているが、余談になるとムクッと起き上がる生徒もいるぐらいだ。同じテーマを扱っているのだから、それが理解できれば目標達成だと思っている。

この居眠りについても約束事がある。人間誰しも、眠気に勝てないことがしばしばある。眠気を我慢すると将来アルツハイマーになるという俗説もあるくらい、我慢できないものである。

そこで、私の授業では居眠り解禁となっている。ただし、五分程度、机にしっかりうつ俯せになって（頬杖をついて眠るとカクンとなって危ないから）という条件がついている。眠る前に「今は授業中であるので、すぐに起きよう」と自己暗示をかけてから眠るように指示してある。大概、ある程度の時間がくれば起きている。それでも起きない場合に限って、名前に加え、「おはよう」と呼び掛けることにしている。これで百パーセント起きる。無理に眠気を我慢していても、頭がボーッとなっているため非効率的であるし、授業中の五分睡眠くらい爽快なものはないため、合理的なくらいだと考えている。

他には、宿題は基本的に強制はしない。本人に必要だという自覚のない学習は時間の浪費である。よって、必要性を認識させることにこそ時間をさくよう心がけている。

また、提出物は次の授業までに、必ず読み、文章や文字の添削と、評価を書いて返却する。時間を空けないことと、必ず添削することで、やる気も削がれず、文章力も向上すると考えている。

## 六、まとめ

今年度から、高校の教壇に立つことになり、未経験のことばかりで試行錯誤の毎日である。進学クラスで、右に述べたような授業をしていて大丈夫かというご指摘も頂いた。そこでは、予備校や塾などに勤めた経験が非常に役に立った。夏期、冬期講習では、集中的に受験問題解答の技術を教えている。普段の授業とは一変して、独創性や感受性を排除し、徹底的に技術を習得させることに目的をおいたものである。

また、自分自身の文学部での受講経験も役立っている。生徒たちにも直接語っていることだが、私も彼らとともに日々勉強している身である。人にものを教えているというよりは、一緒に考えて楽しんでいるといった方が、実感に即している。

教えている方が楽しければ、教わっている方も楽しい。故・淀川長治氏の映画評論は、映画や俳優を誉め、映画を楽しむことに

費やされていた。彼の話を聞いていると、不思議なことに、つまらない映画も見て良かったという気になった記憶がある。私の場合、彼のようにうまくいかないことは言うまでもないが、淀川氏が映画を愛したのに負けないくらい文学が好きなことは間違いない。少しでも国語を楽しいと感じてもらえるよう、日々学びつづけようと思っている。

（みえの・ゆか　中京商業高等学校非常勤講師）